

世界の広さと狭さ ～様々な国での研究を通じて～

東理大薬、東理大 DDS 研セ・北村 正典

海外にて研究を行うということについてどのようにお考えでしょうか？語学が心配だとか、研究内容が難しそうだという声が挙がるのではないかと思います。私の場合、それらがとても小さいことであると思えるぐらいに、研究に対する考え方、また人生観にも大きく衝撃を与えるものでした。

私の海外研究経験をお伝えするために、研究経歴を少しお話しします。私は、平成 10 年 3 月に信州大学理学部化学科（加藤博研究室）を卒業し、北海道大学大学院薬学研究科（高橋保研究室）に入学を致しました。高橋先生は、博士課程に進学する学生には早くから留学をさせたほうがよいとの見識をお持ちの先生で、運良く世界各所で研究をする機会を頂きました。

平成 11 年には、アメリカ、カリフォルニア大学アーバイン校 William J. Evans 先生の研究室に 3 ヶ月間お世話になりました。初めての異文化に戸惑うことも多かったのですが、それだけに得るものは大きかったと思います。博士課程 1 年の平成 12 年には、旧高橋研究室のメンバーであった北京大学、席振峰教授のところで、1 ヶ月間実験台を与えていただき、平成 13 年 6 月にはドイツ、マインツ大学 Jun Okuda 先生（現アーヘン工科大学教授）に 3 ヶ月間受け入れていただきました。博士課程修了後には、京都大学、丸岡啓二先生の研究室に博士研究員としてお世話になった後、テキサス大学オースティン校（Eric V. Anslyn 研究室）にて博士研究員として 1 年半を過ごしました。そして、平成 19 年より東京理科大学薬学部（青木伸研究室）にて、助教を務めさせて頂いております。

このように幾度となく海外で研究をさせていただいてきましたが、あるときから不思議と世界はそれほど広くないのではないかと思わせるような出来事の連続に遭いました。人と人との繋がりが、広い世界をどこまでも続くような感じがしてくるのです。また、全く異なると思っていた研究分野は、思った以上に近いものであることに気がつき始めました。本講演では、広い世界においても、ひとりひとりの研究者やひとつひとつ研究テーマへの出会いを大切に思う気持ちを述べていこうと考えています。